

ウィリアム・マグヌソン 著（黒輪篤嗣 訳）
『世界を変えた8つの企業』

横山 恵子

関西大学教授

本書は、413頁の大作だ。古代ローマ時代から現代に至るまで、社会に大きな影響を与えた企業の誕生から衰退までのプロセスを追い、その時代背景や社会との関係を丹念に描いた労作である。しかしながら、読み始めると、あっという間に読み終えることができる。平易な文体で、社会と企業と人々の相互作用と、そこで織りなされたドラマを明瞭に描き出し、読者をその時代に誘うのである。

本の構成も単純明快であり、1章ごとに1つの企業とその時代を取り上げ、8つの企業と時代のドラマを紹介することで、企業がどのように進化して、世界を形づくってきたのか、その功罪を検討している。

この本を貫くスタンスも明確だ。資本主義から生まれる巨大な力は何か。そして、どのような影響を社会に及ぼしたのか。その資本主義の物語を紐解くと、じつは企業の物語であること、そして、企業の物語とは、企業という舞台で繰り広げられる人間の物語であること。筆者はそのような立場から、社会と企業と人々の相互作用のドラマを、大胆に描き切っている。

そして、もう一つ、企業は善玉のこともあれば、悪玉のこともあるという立場で、企業の発展プロセスを冷静に見ている。そもそもの企業の存在意義や目的は、その誕生当初から変わらず、「共通善」の促進だとしている。共通善とは、企業と社会の双方にとって良いことを意味

する。本書は、この共通善の追求という企業の本来の役割が、常々放棄されてしまった歴史を追っている。共通善の追求という目的のための手段に過ぎない「利益の追求」が、次第に目的化されてしまったことに警鐘を鳴らしている。

各章で論じられている内容は、下記のとおりである。

第1章「ソキエタス」がもたらしたローマの
繁栄

古代ローマで公共事業を請け負った「ソキエタス・プブリカノルム」は、今日の株式会社の原型と言える共同体組織であった。所有者と切り離された団体であり、所有と経営の分離が始まり、売買可能な株式（パルテス）が存在していた。ソキエタスは、専門性と効率性を向上させることで、自己利益だけでなく、ローマ帝国の繁栄に大きく貢献した。その一方で、ソキエタスの台頭は、政治腐敗や貧富の格差拡大、属州の人々の奴隷化といった社会問題も引き起こした。

第2章 メディチ銀行が築いた金融システム
ルネサンス期のフィレンツェにおけるメディチ銀行は、現代の金融システムの基礎を築いた。彼らは、複式簿記や為替手形といった革新的な金融技術を開発し、国際貿易を促進した。銀行業を通して、メディチ家はヨーロッパ経済を支配し、稼いだ巨額の富でルネサンス文化の開花

を支えた。しかしながら、メディチ家の権力集中は、政治的陰謀や腐敗を生み出し、彼らの没落を招いた。

第3章 東インド会社が解き放った株式に秘められた力

東インド会社は、世界初の株式会社（ジョイント・ストック・カンパニー）である。株式発行を通じて巨額の資本を集め、グローバルな貿易ネットワークを構築した。株式は、リスク分散と投資機会の拡大をもたらし、資本主義経済の発展に貢献した。しかしながら、東インド会社の活動は、植民地支配や搾取、アヘン戦争といった負の側面をもたらした。

第4章 アメリカ大陸横断鉄道と独占の問題

アメリカ大陸横断鉄道は、アメリカ全土を結びつけることで、経済成長を加速させた。建設に関わったユニオン・パシフィックは、独占的な支配力を獲得し、経済や社会に大きな影響を与えていく。しかしながら、鉄道建設に伴う土地投機や政治腐敗、そして運賃のとめどない上昇等、独占による弊害が顕在化した。この経験は、独占禁止法の制定など、政府による企業規制の必要性を認識させる契機となった。

第5章 フォード・モーター・カンパニーが可能にした大量生産

フォード・モーター・カンパニーは、T型フォードの大量生産を通じて、自動車を大衆化し、モータリゼーション時代を切り開いた。大量生産は、生産性向上とコスト削減をもたらし、莫大な利益を生み出した。それに伴い、フォードは労働者の賃金倍増を行い、労働者を含めて人々の生活水準向上に貢献した。しかしながら、大量生産と大量消費社会は、環境問題や労働疎外といった新たな課題も生み出した。

第6章 国家を超越した石油会社エクソン

エクソンモービルは、国家を超えた巨大企業、多国籍企業の典型であり、エネルギー供給を通じて現代社会を支えてきた。その影響力は、政治や経済を大きく揺るがした。彼らの経済活動によって、経済成長と技術革新を牽引したが、

同時に環境汚染や資源をめぐる紛争の原因ともなった。

第7章 コールバーグ・クロビス・ロバーツと「乗っ取り屋」の時代

コールバーグ・クロビス・ロバーツは、レバレッジド・バイアウト（LBO）を駆使し、企業買収とリストラを繰り返した。LBOは、企業の効率性向上と株主価値最大化に貢献したが、同時に雇用不安や短期的な利益追求を招いた。この時代は、株主資本主義の台頭と、企業の社会的責任に対する議論を活発化させた。

第8章 スタートアップ企業フェイスブックによる創造と破壊

現代のスタートアップ企業として取り上げられたのが、フェイスブックだ。フェイスブックは、ソーシャルメディアを通じて人々のコミュニケーションを変革し、新たなビジネスモデルを創出した。ソーシャルメディアは、情報共有と民主化を促進したが、プライバシー侵害やフェイクニュース拡散といった問題も引き起こした。

そして、結論の章では、企業という器の中で、人々の協力がもたらす偉業（共通善）を称えると同時に、最後には企業は必ず利欲に目がくらみ、悪徳の道に進んでしまうことが避けられない運命なのかと問うている。その問いに対して、筆者は、企業を修正するための原則として、下記の8原則を提示して、本書を締めくくっている。

- (1) 社会を壊してはならない。
- (2) 長期的に考えよ。
- (3) 株主と共有せよ。
- (4) 競争せよ、ただし公正に。
- (5) 労働者を正當に扱え。
- (6) 地球を破壊してはならない。
- (7) 独り占めしない。
- (8) 迅速すぎてはならない、さもないと破壊しすぎる。

このように、本書は、企業が世界に与える影

響を多角的に検証し、その功罪を理解するための重要な視点を提供し、企業が社会全体にとってより良き存在となるための8原則を提示した。この8原則は、いたってシンプルであり、そこに目新しさはなく、言ってしまうとごくごく当たり前のことである。いつも思うことであるが、当たり前のことをまっとうに実践していくことこそが、実は一番難しいことなのだと気づかされる。

もう一度、本書のメッセージを振り返ろう。

企業は、共通善を目指して生み出されてきた。人々の協力を束ねて偉業を成し遂げ、社会を進展させてきた。まさにイノベーションを生み出してきた。しかし、企業は、イノベーションによる支配を確立すると、腐敗や濫用に走ってしまう。社会がいやというほどその濫用の負の側面を味わった後、状況を是正するための法律や政策が練られた。このような、「イノベーション→腐敗・濫用→法制度による是正」といったプロセス、換言すると、「社会的益の創造→社会的にマイナスの影響→政府のコントロール」という図式は、太古の昔から現代にいたるまで繰り返されてきた。

本書には、ローマから現代にいたるまでの、8つの企業の栄枯必衰（フェイスブックは今も栄華の時代にあるかもしれないが）とその時代とが取り上げられている。この8つの企業とその時代は、文脈も内容も違えど、本質的に、皆同じプロセス、すなわち上記のプロセスを経ていた。

最後に、完璧な本などこの世に存在しないことを前提に、疑問点をまとめたい。

まず、本書では、「共通善」という概念を繰り返し使用しているが、企業と社会の利益ということしか説明していない。ここで、社会とは何を意味しているのだろうか。8つの企業の各時代において、社会の意味するところは、大きく異なっている。「社会」の領域定義を検討した上で、先行研究との関連の中で「共通善」の定義を考察する章があると、学術的価値がより高まるであろう。

次に、なぜこの8つの企業を取り上げたのか、その選択理由がきちんと描かれていない。社会や経済に大きな影響を与えた企業は、この8つの企業だけでない。この8つの企業をピックアップした理由について、もう少し説明が欲しかった。

以上の疑問点があるものの、本書のスタンス、メッセージは明確であり、それを裏打ちするに十分な歴史的な考察がなされている。現代社会における企業の役割を考える上で、本書は示唆に富む内容だと言えるであろう。

(東洋経済新報社、2024年4月、
x+413頁+(23)、2,800円+税)